書評　下山嬢子著『島崎藤村――人と文学――』

高橋広満

〈日本の作家100人――人と文学〉シリーズの一冊。作品案内を巻末に付すが、主たるところは島崎藤村の評伝にある。

評伝という方法は、その人と、その人のなしたものとの間に、つよい相関性を認めることを前提としている。文学者の場合なら、人と創作の間のだ。が、その相関の綾は、必ずしも単純ではない。言うまでもないが、それがどんなに事実に即した作品であれ、フィクションの器を持つ限り、作中人物をそのまま作者やモデルと同定できはしないからだ。

下山氏がとった方法は、作者の外的事情を埋めることの一方で、作品世界の構造と言葉を周到に分析し、そこから藤村的思考をあぶりだすというものであった。氏には、すでに研究史上の必読書となっているすぐれた藤村論集『島崎藤村』（一九九七年　宝文館出版）があるが、そこでの成果を土台に本書で紹介・分析された藤村作品は、小説だけでも実に七十篇を超える。それらが幾層にも重なり合って、新たな藤村像がじわりと立ち上がってくる。

評伝とはまた、生涯を範囲にしたものでもあろう。しかも、時代や社会を視野に入れ、父母を始め、彼を生み出した風土や、彼が及ぼした影にも触れるという意味で、きわめて歴史的な発想を伴うものだ。そこでは、事件や作品の一回性・個別性が大切にされつつも、それらをひと連なりにとらえるような視線も求められるはずだ。もちろん、ここでひと連なりとは、単純な連続や反復を意味しない。成長や変奏、時には矛盾も抱えた連関のことである。その評伝という形式に、いかにも藤村という人物がふさわしい人生を持っていると錯覚してしまうほど、本書は、時間をまたいだその連なりに意識的である。

そういう感慨の例として、藤村におけるキリスト教の問題を挙げておこう。それは『新生』をめぐるものだが、若き日

の受洗と棄教に関わる話でもある。下山氏の『新生』論は、日本からの罪びと岸本の〈異界〉往還の旅と見るような構造的な大きさをもつ。往還の折り返し点は、フランスの田舎リモージュだ。世界の一切の物体を構成する要素「四大（地・水・火・風）」に自己救済のイメージを抱く岸本が、その四大に触れる場所こそリモージュであることを氏は割り出し、その岸本が、聖母マリア像を祀る辻堂近くの教会に至って、永遠なるものに向き合う霊的な旅人として自己をとらえ得るような変容をみるという。「岸本は何者かに触れられ、自己の主体的観察者の位置から〈顛倒〉され、〈被観察者〉の位置に立たされる」と氏が表現したこの体験は、すぐれてカトリック的なものであった。

氏によれば、しかもその真の自覚は、帰国後、再び節子との関係を通ることで明確化されるものである。節子を結婚させ、自分も再婚しよう、などと考えて帰国した岸本の前に現れた節子に対し、岸本のとった、よりを戻すという道は、作品内の者の目にも、作品外の目にも、批判の対象と映るようなものであったが、作品世界の構造と言葉に耳をすませた氏は、ここをリモージュ体験の真に形をとるところであるとみる独自の見解を得た。

神に自己のありようを委ねたからこそ、真の自分であることが可能になり、だからこそ真に他者と向き合うことができるのだという認識を、リモージュ体験はもたらした。帰国後の岸本の節子への再びの行為のうちに、下山氏はその体験の本質と響きあうものをみるのだ。目の前に苦しむ「隣人」に手を差し伸べることこそ、神の前に自分を委ねて生きようとする人間のすべきことではあるまいかというところに至った岸本の愛は、「男」としての自分が、節子の再びの生の力となる限りにおいては、ひとつの形をとらねばならない。

それにしても、節子のモデルこま子が現実にたどった道はどうであろう。こま子の墓を再訪する下山氏のまなざしは、苦しみに満ちた一女性の生の形に共振的に注がれるが、『新生』という作品の構造と言葉から藤村の思考と世界をとらえようとする氏は、こま子の流転のほうから一息に、岸本ひいては藤村の認識と行為に断罪的視点を与えるような道はとらなかった。裁くべきものと裁かれるべきものを隔てるのとは違うやり方で、氏は人における真の宗教的経験というものをとらえたのだと思う。

リモージュ体験は、一新生事件を超える問題でもあるようだ。藤村は早く、明治学院二年目の十七歳で受洗し、二十一歳で棄教した。棄教は、許婚のある佐藤輔子への愛に苦しみ、関西漂泊の旅に出る時のことだ。「文明開化の表層的な熱に浮かされたもののようであった」という、受洗に対する下山氏の言は、そのあっけない棄教の原因をも指している。ところが、その棄てられた宗教が、棄てた時点とは比べものにならぬ深々とした相貌を備えたカトリックに姿を変えて再び立

ちあらわれることになるのだというのが、本書から受けるダイナミズムだ。若い日にはまったく触れ得なかったその本質に打たれることになった人として、岸本、いや藤村がいる。あらかじめ青春の小さな罪によってそれが棄てられていたことは、この体験の奥行きを作っている。もちろんそれは故意でありえない。にもかかわらず、それが人生における、あたかも必然的なひと連なりであるように映るのだ。藤村の死後、妻静子がカトリックへと改宗するところまで、下山氏の筆は及んでいる。

連なりを見据える視線は、藤村史の節目に厳密であろうとする面にも現れている。明治二七年のルソー体験、二九年の「木曾谿日記」執筆などが、その時の藤村の姿を示す重要な出来事であるばかりでなく、ありのままの肯定や自己告白など、後に明瞭になる方法や思想の萌芽の一段階としてとらえられているのはその例だ。また、『夏草』を編むことのうちに透谷を相対化する姿勢を見て取り、その透谷的問題である〈社会〉を、『緑葉集』の世界を解き明かすキーワードとしていくようなところにもそれは示されている。

青山半蔵以外の人物を、半蔵との差異において浮かび上がるように仕組んだ小説として、下山氏は『夜明け前』を読む。『破戒』以後の代表作をめぐる分析・解説は、この最後の長編の方法的分析を含めて、本書中最も読みごたえのあるところだが、本書の特徴は、長編を鎖のようにつなぐ『緑葉集』から『嵐』に至る短編集の分析や、長編執筆のプロセスに触れた部分の指摘のおもしろさにもある。『桜の実の熟する時』の四、五章に見られる「時制意識の混乱」を、藤村の宗教体験の本質をあらわしたものとするところなど大切な指摘だ。

評伝を支える信頼性という点について、最後に少し触れておきたい。下山氏は藤村研究の基盤となる年譜的事実を実証的に明かす地味な作業も続けており、ここでも、東京音楽学校選科入学の時を、従来の明治三一年四月から明治三〇年九月に訂正し、学校も正式には「高等師範学校附属音楽学校」選科であることを指摘するなど、その最近の成果を加えた。星野天知らとの交友や佐藤輔子との関係などについての新見解も、近年の調査に裏付けられたものであり、自ら得た、こま子に関連する聞き書きも紹介した。

入門者にも専門家にも、確かなものの届く一書である。

（二〇〇四・一〇・一五　勉誠出版）